



[評者]

志水 太郎

獨協医科大学主任教授・総合診療医学

「卓越した ジェネラリスト診療」入門

複雑困難な時代を生き抜く臨床医のメソッド

藤沼 康樹 著

●A5 頁296 2024年06月
定価：4,400円(本体4,000円+税10%)
[ISBN978-4-260-05354-9] 医学書院刊



日本の多くの若手総合診療医に“oyabun”と慕われ、私自身も敬愛してやまない藤沼康樹先生(医療福祉生協連 家庭医療学開発センター長)の初の単著を拝読しました。読了後に浮かんだのは、米国の医師フランシス・ピーボディ(1881~1927)の格言「患者ケアの秘訣は患者をケアすることにある」¹⁾でした。「臨床医の重要な資質の1つは人間性への関心である」とするこの格言が、本書の箴言の数々と共鳴し、胸を撃ち抜かれたような衝撃を何度も感じました。それが、この本の通読1回目の感想でした。

本書の第Ⅰ章1節の最初のページに明記されているように、医療は「不確実性」が高いものです。現代の医学教育では、多くは説明可能でクリアカットな部分が好まれ、不確実な「灰色」な部分(グレイゾーン)は全体からすれば補集合の扱いに甘んじ、時に無視されてきたのではないかと思います。しかし、この不確実な領域への関心と探索がなければ、全体をつかむことはできないでしょう。コントロール可能な壁の中の世界にだけ生きていたのでは、エルディア人たちは自分たちの始祖のことを決して知り得なかったのではないのでしょうか(『進撃の巨人』)。本書にはその不確実性をも可能な限り言語化して構造化する試みが随所にある、本邦で現在これに比肩する類書は存在しないとみます。

本書は3章から成ります。第Ⅰ章は、家庭医の技芸が光る診断・治療について、そして外来マネジメントのクリニカルパールのなどの具体的なアドバイスに満ちています。個人的には、5節の「プライマリ・ケアにおける『治療学』」の中でも「リアシュアランス」の項(本書p.88~)に強い共感を覚えま

した。また、3節の「『家族』を診る方法」(本書p.44~)にも大いに学びました。第Ⅱ章は、本書の中核を成すと思われます。「卓越したジェネラリスト」の技術や考え方、振り返りの内訳を明確に言語化し、さらにそれを達成する方策を明示し、わかりやすいケースとともに詳述しています。これら大量のケースの藤沼先生のself-reflectionを追体験したい、というのはさすがにわがままな願いでもあり、そこは藤沼先生のPodcastやSNSでのコメントなどで補完するのが理解を深める方法としてよいと思います(あるいは次作に大いに期待します)。第Ⅲ章は、Ⅱ章で解説された「個」の卓越性から離れ、「チーム」や「未来」にどのように卓越性を展開・継承させるかという、より発展的な記述となっています。加えて、20ページ近い長めの「おわりに」には、未練を感じつつ次作への接続を期待させる内容となっています。

本書の装丁は、「灰色」が基調になっています。これには、さまざまな意匠が込められていると感じます。1つの解釈は不確実な医療、すなわち「グレイゾーン」に焦点を当てるという示唆かもしれません。本書が東洋で生まれたことに感謝しつつ、ファッション史における「黒の衝撃」ならぬ、「灰色の衝撃」として不確実性への対処に新たな角度から意味を与えたことが医学史に記憶され、そこに内挿されたオリジナルのプリンシプルや技芸とともに、長く愛される一冊となることを願います。

●参考文献

- 1) Peabody FW : The Care of the Patient. JAMA 88 : 877-882, 1927